

Title	日露戦時・戦後の仙台：都市と軍隊に関する覚書
Author	遠城, 明雄
Citation	空間・社会・地理思想. 18 卷, p.17-25.
Issue Date	2015
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	九州大学大学院人文科学研究院地理学講座
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-014

Placed on: Osaka City University

日露戦時・戦後の仙台

——都市と軍隊に関する覚書——

遠城 明雄*

Akio ONJO

Notes on the Contradictory Relations between Modern City and Armed Forces:
A Case of Sendai City during and after Russo-Japanese War

I はじめに

近年、「軍都」、「軍郷」、「軍港」に関する研究が活発化している。多くの論者が指摘するように、軍隊は近現代社会の形成と再編を理解する上で欠くことのできない権力・暴力・統治の装置であり、都市空間・社会を考える場合でも、都市構造、インフラ整備とそれに関わる中央・地方の政治関係、経済活動と地域社会の諸組織、治安対策、歴史意識や地域アイデンティティ、市民および国民意識の形成など、その影響は多方面に及んでいる(荒川, 2001, 2007; 河西, 2010; 上杉, 2012; 松下, 2013)。

本稿のささやかな目的は、日露戦時・戦後の仙台市を対象に、軍隊との関わりあるいは距離という視点から、都市民衆の動向と都市社会問題の一端について素描することにある。いくつかの断片的な姿だけを取り上げる単なる覚書にすぎないが、明治後期の「軍都」仙台における社会的結合のあり様や社会問題への認識について考えてみたい。

明治当初から師団の所在地であった仙台は「軍都」として位置付けられているが、当該期におけるその都市社会の状況や都市問題、また軍都・学都としての性格について、すでに難波(1994)や佐藤(2006)の研究があり、前者は残飯屋や祝捷会など本稿と重なる主題を論じている。また「軍都」熊本に関する水野(2011)の研究では、残飯屋と「貧民」、御用商人など本稿と関わる問題が取り上げられている。本稿はこれらの論考から多くのことを学ばせていただいた。

II 「軍都」の戦時と戦後

1. 祝捷行事について

日露戦時下、仙台市でも戦勝報道が発表されるたびに、祝捷行事が開催されるようになり、それは次第に熱を帯びていった。これらの行事の主体となったのは、町と複数の町の連合および区といった地域住民組織、学校、同業団体、自転車愛好団体、企業などである。なかでも中心的な役割を果たしたのは町であり、東京市の場合などと同様に、この時期の仙台において町を基盤とした住民の社会的結合が強かったことがうかがえる。以下では祝捷行事の具体的な姿とその変化を追うことにしたい。

5月に九連城占拠が報じられると、通町と東一番丁の町民が提灯行列を行った。前者の場合、川内の師団司令部と各隊営門および榴ヶ岡の歩兵第四連隊営門でそれぞれ万歳を行って市内を練り歩いており、これ以後町による多くの提灯行列はこの2ヶ所を必ず訪問して類似の経路で行われるようになった。また後者では、1戸1名ずつの割当てで女子学生風に扮装させた芸妓や酌婦も行列に参加させようとしたが、当局からの指摘によって扮装を看護婦風に変更したという(『河北新報』1904年5月14日)。

こうした町民たちの提灯行列をめぐって、県警部長は5月12日に所轄の署長らに対して、行列を制止する必要はないが、5月8日に日比谷公園で混乱により死傷者が出た事を踏まえて、一定の条件(隊列は4列以下で1隊200人以下に限定、監督者の届け出、提灯を持たない者・酒気を帯びている者・異様な服装など公安風俗を害する者の参加禁止、提灯に風俗を乱すような異様な図柄を描かないことなど)に違反した者の取り締りを行う旨の通達を出した。実際の町ごとの参加者は200人を超える場合も多く、必

* 九州大学

ずしもこの規定が遵守されていたわけではないが、参加者の選別と排除が行われるようになったといえるだろう。

7月9日に旅順陥落の風説が広まると、肴町、東一番丁と定禅寺通、八幡町、宮町、北鍛冶町、本荒町、南町、二日町などでは、会長、会計、救護委員らが中心となって行列の準備に取りかかった。このうち肴町は楽隊を組織して軍歌(「……武勇優れし武士の建つる軍功を祝ふ為、一団隊の祝捷は仙台市の肴町、進めや進め日本兵……」)を唄い万歳を連呼しながら、「早過ぎた祝捷行列」を行ってしまった(『河北新報』1904年7月11日)。また自転車愛好家たちが新意匠の自転車行列を企画しており、100名ほどの参加者が見込まれている。

さらに各町は行列に加えて、運動会の開催、町内での飾り物(提灯、国旗、緑門など)、町内の一斉休業、祝捷会・祝宴会の開催、祝電・祝詞の発表、出征軍人の家族の慰問、戦勝祈願式の執行など、さまざまな行事を競って計画するようになり、また町だけでなく兵事義会や新聞社、会社なども行事の主体に加わるようになった。8月時点で旅順陥落を想定した提灯行列への参加申し出は、36団体7,000人余に達し、市民の熱狂はますます高まっている。

ただし、市民のいささか行き過ぎた行動に対して、治安維持以外の弊害も懸念されるようになった。それは大きく二点にまとめられる。ひとつは、町や区の内部とその間で祝捷をめぐる競争と対立が激化し、市行政に悪影響を及ぼすことが問題視されるようになった点である。たとえば国分町1～5丁目では、楽隊の経費などをめぐる意見対立から内紛が発生し、各町個別に任意で祝捷すべきとの意見が出るなど、祝捷の豪華さや運営の主導権を争うあまり町・区間の競争が過熱していがみ合いが生じ、銃後の円滑な行政運営に支障が出かねない状況が生じていた。

もうひとつは、『河北新報』の「論説」(一面に掲載という意味)で、「…然らば余りに大業なる祝捷騒ぎを為すことを見合はせ、三円の会費を投ずるのは二円とし、其の一円を以て恤兵するに於ては、軍隊の後援としては祝捷騒ぎを為すよりも遙かに至大なる効果あらん。吾人は仙台市各町に於ける先日来の計画の余りにオダチ過ぐるを遺憾とせし処…」(「祝捷と救恤」『河北新報』1904年8月10日)と指摘されたように、祝捷行事が戦争の実質的な支援とは無関係な単なる騒ぎになりつつあると考えられていた点である。櫻井(1997)が東京市で着目したように、祝捷行事は市民(町民)の戦争に対する「熱狂」の現れであ

ると同時に、息苦しい戦時下での息抜き・娯楽といった側面があり、市民はそれを「祭礼」と同じような行事として楽しもうとしていたのである。このため兵事義会長でもあった早川智寛仙台市長も、勝利の確定以前から祝捷準備に汲々とする市民の行為を、「一時的の祭礼行事」に過ぎないと指摘し、「…国民として刻下の行動、遺憾ながら或点には首肯し難き節なきにあらざ…」(『河北新報』1904年8月28日)と述べて、人々に国民の心得と覚悟を問わねばならなかった。

こうした性格を帯びていた祝捷行事が、地域の「貧民」にどのように受け止められたかについてはよくわからないが、祝捷会が生活難からの「解放要求を吸収」する役割を果たしたという指摘もある(能川、1997)。仙台でも、一家の稼ぎ手の出征に加えて、日雇稼、人力車夫、土工人夫、内職(女性)などは仕事の減少と賃金下落に直面しており、「貧民」の生活問題が深刻化していた。このため仙台兵事義会は、出征軍人家庭の生活困窮者に1日米1升を支給したほか、陸軍の軍服などの修理といった内職やマッチと封筒の製造所と特約を結んで、仕事を斡旋するなどの対策を取っている(難波、1994)。その一方、人力車夫の場合、戦争当初は仕事が減り50人余の親方が営業税滞納のため人力車を差し押さえられたが(『東北新聞』1904年6月24日)、その後負傷兵などの帰還とともに仕事が増加したことで、車夫の収入は1日1円程度となり貯金をする余裕が生じ、壮健な「貧民」の多くが車夫になろうとしたともいわれている(『河北新報』1905年5月6日)。「貧民」の生活状態は、その世帯状況や職業によって多様かつ流動的であり、このような点も踏まえて、祝捷行事への関わりを理解する必要があるだろう。

早川市長は1904年8月18日に行列隊の各町代表者を市役所に召集して、行列準備を現状の程度にとどめること、行列について警察の指示に従うこと、傷病軍人の歓迎について市内一般あるいは各町で申し合わせを作成し永続すること、を依頼している。ただし最後の項目に関して、町の代表者たちは傷病軍人の歓迎を負担と捉えたようで、対応を各町で一任することに決しており、市長からの依頼は無視された形となった。凱旋の受け入れは、祝捷行列とは性質が異なり、またそれが頻繁になることで、市民はそれを負担に感じるようになっていたのだろう。

その後、市役所と警察が有力者に働きかけたこともあって、二十人町、大町、立町、田町、土樋、名掛町、国分町、停車場前、荒町、北鍛冶町、北材木町、宮町、南町、南材木町、新傳馬町、東二番丁・清水

小路、元寺小路、元櫓町、本木材町、東一番丁・定禪寺通の22ヶ町から選出された委員によって、各町聯合行列隊会議が数回にわたって開催された。会議では、集合地と道筋、行列の順番などについて話し合いが行われ、「祝捷隊申合」によると、行列は、市内の主要道路を行進するルート(仙台停車場そばの清水小路一帯に集合し、南町通から川内(司令部と各隊に祝辞)、澱橋を渡って北三番町、北鍛冶町、国分町を左折して榴ヶ岡へ移動)で、先頭を歩く楽隊の費用は大町が負担することが決定されている。行列の順番はくじ引きだったが、二十人町が先頭を引いたにもかかわらず交渉の末、大町に譲っており、町の「格」やプライドといった意識が働いていたのであろう。その後、準備のために5名の常設委員が町名による投票(新傳馬町、二日町、肴町、立町、新河原町聯合)で選出され、事務所も設置された。警察と行政は、町ごとの自発性を認めながらも、その間の調整を図り、統制され内容も抑制された祝捷行列を目指したのである。

しかし、連合会による行列はかえって群集雑踏を生じさせ、不測の事態が予想されることなどを理由に、東一番丁中央会や国分町などいくつかの町が連合会からの脱退を表明したことで、連合の動きにストップがかかった。東一番丁の場合、これまでも町内の不和により北、中央、南の三部に分かれて行事を担当しており、その影響で祝捷行事も個別に行っていた。また連合会に従う必要はないという強い意見の出た町もあり、市や一部の地域有力者による連合化に対して反発があったと思われる。しかし、市長や区長、連合会の交渉委員らが、分裂の動きの修復に動き、また未加盟の町にも参加を働きかけた結果、中央会などが参加に方針転換し、連合行列に加わる町も増加したことで事態は一応沈静化した。

9月6日に行われた遼陽占領祝賀行事では、市による祝捷大会と聯合祝捷行列が行われ、これ以後の祝捷行事のひな形となった。大会は桜ヶ岡公園を会場として、早川兵事義会長、三好成行留守師団長、田辺輝実宮城県知事の祝辞、祝電の読み上げ、煙火の打ち上げといった式次第は進められた。なお会場では商人が自由に店を開くことが認められており、祭りの要素も残されていたのかもしれない。雨中にもかかわらず、行列には33ヶ町、総勢1万人余が参加しており、先頭の大町は、東京に行列用の服を新調するほどの力の入れようであった。ただし東一番丁は中央会と南が別々に隊列を組んでおり、町は分裂したままであったほか、田町は連合行列に参加せず単独で行列を行っている。

翌1905年1月5日の旅順陥落祝捷会は、会場を仙台停車場前に移して挙行され、学校聯合提灯行列が新たに加わっている。連合行列に参加した町をみると、前年9月に参加していた荒町、河原町聯合、米ヶ袋聯合が参加していない。大町は200人余りが独自に祝捷行列を行ったほか、川内地区では三町(川内、亀岡、山屋敷)合同の祝捷会が開催され、祝捷門と凱旋門を建てるなど、新年会と重ねてこれまで以上に多くの町が祝捷会をおこなっている。またキリスト教徒の連合祝捷会も南町通の日本基督教会堂で開催しており、祝賀行事は最高の盛り上がりを見せた。

1905年3月の奉天撫順占領の祝捷行列の場合も、11日に田町と大町、第二高等学校尚志会など1,000人余の行列が行われ、12日に市内連合(33ヶ町)の行列が各町から8,300人を動員して実施された。田町は今回も連合に加わっていないが、その理由は不明である(『東北新聞』1905年3月13日)。

仙台では合計で5回の祝捷行事・行列が行われたが、各町の足並みは必ずしも揃わないままであった。町民たちは国家の勝利を祝いながら、自らの町で楽しみ、また町の力や富を顕示することに熱心なあまり、結果として国家と市の現状に対して無関心になっていたといえる。祭礼で山車の装飾を争うのと同じような感覚や意識だったのかもしれない。さらに区長と町の関係、近世以来の町内・間の序列意識や対抗関係など複数の要素も加わることで、祝捷行事は町と町の競争の舞台となった。行政はこうした町民のエネルギーを、「市民」と「国民」の形成へとつなげようとし、祝捷行事がその形成の場となっていたことは確かであるが、市行政が求めた「市民」と「国民」としての自発性や責任は、地域における社会関係に埋め込まれ、戦時の憂さ晴らしといった意識や感覚に規定されていたように思われる。

2. 「廃兵」について

1906年4月に政府は廃兵院法を公布した。当初、陸軍は東京、大阪、小倉の3ヶ所に廃兵院を設置し350人を収容定員とする予定であったが、翌年東京市のみを設置され、その後も定員が埋まることはなかった(山田, 2005: 郡司, 2004)。

同年の6月から7にかけて、仙台市内の廃兵の生活状況が『河北新報』で19回にわたって連載されている(「仙台市内廃兵の状況」『河北新報』1906年6月18日～7月30日)。「婦人記者」が31名の廃兵とその家族を訪問して、負傷した時の状況や現在の身体の調子、生活の姿を聞き取るというスタイルの記事であった。婦人記者が取材を行ったのは、婦人層が

銃後のさまざまな生活問題の担い手だったためであろう。

半身不随、四肢の一部欠損、失明など様々な傷を負った人々の来歴や、負傷によってかつて職業(大工など)に戻れず、行商などによって糧を得る姿が時に涙ながらに語られていく。特に少なからぬ廃兵が働くことができない状態で今後に不安を抱えており、運よく市役所や軍関係の仕事によって収入を得られるようになった廃兵もいたが、それは例外であった。

多くの語りがどこか諦念を漂わせているなか、時に国家や社会の自分たちに対する無関心と無理解にいらだちを表出する語りが見られる。たとえば、元憲兵曹長は、国からの支援が期待できない廃兵に対して、「生活の道即ちパンを与える方法を講じる」必要性を訴え(『河北新報』1906年7月3日)、また元特務曹長は、「兎角日本人は熱し易く冷め易いです。戦争当時は名誉の戦死とか負傷とかと声を高くして騒ぎましたが、平和克服以後只今の状態では全く燈火の消えた様です」と語り、日本人に対する怒りと、地域社会において名誉の戦死・負傷から不名誉な「不具者」に見なされるようになるのでないかという今後への不安を露わにしている(『河北新報』1906年6月26日)。こうして、廃兵の語りによって可視化されたその生活問題は、「貧民」問題と関係しながら、日露戦後の都市問題のひとつとなった。

廃兵に対する社会的関心は高いとは言いがたい状況があったが、そのなかで廃兵とその家族の生活問題に関心を寄せた集団のひとつに、銃後を支えていた愛国婦人会がある(山田, 2005)。仙台でも件の婦人記者が亀井英三郎知事の夫人(愛国婦人会宮城県支部長)を訪問した際、夫人は、廃兵の状況について救済手段はないが等閑視できず、取り急ぎ市内を5区に分けて慰問を行っていると答えている。ただし戦時中に、着飾った慰問委員が「貧困層」の多い下士兵卒の家族を訪問することは、かえって違和感を与え、その訪問を迷惑や負担に感じさせることになりかねないという指摘もあり(『河北新報』1904年5月10日)、国民としての責任と「善意」に基づくない場面において、社会の階級対立が露呈し、増幅する可能性があった。

さて、11月30日の『河北新報』の一面で「廃兵商館」(のちに「仙台廃兵館」と改称)という事業の設立が報じられている。大戦後の最も不快な対照として、将校と廃兵となった下士卒の生活の落差があり、社会が「国家制度の外に立ちて、社会的に是等の不快なる対照」を緩和する必要があると指摘した上で、東

京の廃兵館設置に際して地方でも市町村による救済が必要であると述べて、廃兵商館の試みを賞賛している。ただし、それは自治体によるものではなく、傷病者自身による救済事業であった。

仙台廃兵館の館長となった高野萬助(北材木町)は、前述の「仙台市内廃兵の状況」の第7回に登場した人物である。高野は歩兵第四連隊付として日清戦争に従軍した後、第二高等学校に奉職したが、再度召集され奉天で銃弾を受けて片足を失った。高野はインタビューで廃兵の悲惨な状況に触れて救済の道の模索を訴えており、恩給や年金を受け取ることのできる自らの境遇に比べて、「貧困者」にならざるを得ない兵卒への強い思いが、廃兵商館設立につながったと考えられる(『河北新報』1906年6月29日、『東北新聞』1906年11月28日)。

開館当初の館員は高野を含めて7名ほどで、元柳町に家を借りて共同生活を送っており、事業が軌道に乗るにしたがって、福島県などからも入館希望者が集まるようになった。開館当初の事業は行商と軍隊からの残飯払い下げであった。行商については、2組に分かれて9時から18時まで市内6～7ヶ所(女学校、将校宅など)を廻り、商家から貸与された小間物類や化粧品などの販売を行っている。当初2台だった行商用の箱車も4台に増加され、開設1ヶ月後には1日平均して6～7円、多い時には10円以上の収入を稼ぐようになった。ただし、最初は行商に不慣れなことや市民の無理解のため時間を浪費したこと、また不自由な身体ゆえに冬季の泥の悪路に苦闘したことなど、廃兵たちの苦労は続いている。ちなみに箱車と服装は戦時にちなんでカーキ色に統一されていた。このほか年末には南町で開催された歳の市にも出店したようである。

残飯払い下げについては、軍の配慮もあって翌年から歩兵第二九連隊の一部の残飯請負が決まっている。廃兵館は上述した残飯屋を開業し、収入を得ると同時に貧民の生活を支えるようになった。さらに詳しい時期はわからないが、残飯の一部を用いて家畜の飼育にも着手したようで、川内に設けられた仙台廃兵館の養豚場の絵葉書(東一番丁佐藤絵葉書店寄贈)が新聞に掲載されている(『河北新報』1907年11月25日)。養豚場の絵葉書が作成されたこと自体興味深いのが、この施設が当時一定の注目を集めていたことを示しているのではないだろうか。新聞を見る限り、屋根付の厩舎が柵で囲まれており立派な施設であったことがうかがえる。こうして廃兵館は行商、残飯販売、家畜飼育など事業を増やした結果、その営業税額(1912年)は19円(営業品目は「雑貨、牛肉販

売、牛乳搾所)」で、市内の中規模商家と同等の収益を挙げるまでになった。

東北新聞や河北新報は、市民に対し廃兵館への「同情」を求めているが、高野は金品の恵与や慈善の申し出をできるだけ謝絶し、また市役所などの援助も受けず、独立自営の道を探ると述べており、それがある程度実現したといえるだろう(『東北新聞』1906年12月13日)。仙台廃兵館の根底には、帝国軍人としての矜持、体面の維持とともに、国家と社会に対する怒りもあったと思われる。

III 「軍都」の経済と社会

1. 地域経済と軍隊

軍隊と地域経済との関係について、「軍隊出動は打撃、滞在は安定、凱旋などの行事はかせぎ時」(功刀1984)という指摘があるように、軍隊という人間と動物、そして多種多様な物と施設の集合体は、地域経済に逆説的な形で影響を及ぼす存在であった。この影響関係を理解するためには、通時的かつ計量的な検討が必要であるが、そうした包括的な検討は筆者の能力を超えているので、ここでは断片的なものだが2編の新聞記事を紹介することにとどめたい。

第一の記事は、1906年の「軍隊の仙台に落す金」(『河北新報』1906年7月11日)である。まず兵営で消費される糧食費について、兵卒一人当たり米6合、副食物、薪炭料で1日20銭として1年72円程度、馬糧は秣や麦の経費で1ヶ月12円、その他の日用消耗品(紙、墨)と被服費(ただし東京の商人が納品しているため、市内の商人は修繕が主な請負内容であった)を合わせると100万円以上になった。これに市内居住の将校の生活費や兵士の市内での消費(遊興など)を合算すると、1年間で250万円以上になり、もし軍隊がなくなった場合、仙台市の経済は3分の1に縮小すると推計されている。したがって、「軍隊の仙台なる名称は成程当然なりと云ふ事に帰着すべし」という評価もあながち大げさとはいえなかったと思われる。日露戦時期の経験を踏まえた概算と考えられるが、軍隊による直接、間接の消費が仙台の地域経済に占めていた大きさがある程度うかがうことができる。

第二の記事は、1910年4月に第二師団の韓国出兵が決定された際、8回にわたって連載された「師団の韓国行と当市の影響」(『河北新報』1910年2月18日

～2月26日)である。この記事では、2年間で7,000人余が渡韓するという想定のもとで、市内へのさまざまな影響が試算されている。

第一に、直接的な打撃を蒙るのは御用商人たちであった。市内の商人たちが納めていた主な商品は米、大麦、野菜、肉魚類と馬糧であり、出兵に伴う減少額は2年間で60万円に達すると見積もられている。御用商人として名前が挙がっていたのは、薪炭では小梨弥助(八幡町、営業税額 56円)、米穀商では福田(琵琶首丁、13円)、針生(河原町、201円)、野津、野菜では及川(大町、37円)、梅津(河原町、51円)、岩井(立町、71円)、魚肉では梅惣(肴町、96円)、松川(肴町、47円)、松村(肴町、39円)、工藤松治郎(立町、522円、金貸業)などで、いずれも地元の中堅・有力商人であった¹⁾。

股野(1912)には「請負業(土木、建築、諸官衛用達)」の項目があり、そこで「軍隊請負」を明記している業者を見ると、「軍隊及び諸官衛用達」という営業品目で、大川泰二郎(本柳町、営業税額 50円)と佐藤新造(名掛丁、47円)、「陸軍用達」で米川虎三郎(大町2丁目、45円)と小林又七(仙台出張所(元柳町、39円))、「陸軍馬糧商」で福田喜三郎(大町1丁目、30円)、「陸軍糧耕、野菜請負」で福田留吉(琵琶首丁、24円)などが挙げられる。このほか土木や労力の請負業者も軍隊関係の仕事を担当していたと思われ、これらの業者は、前述の60万円には含まれていないが、出兵の影響を受けることになったと考えられる。請負業者のなかには日露戦時中に、一攫千金を求めて大陸や朝鮮半島などに赴いた人々も多かった。なお1905年の「仙台市職業別戸数割」(仙台市役所1908)によると、戸数割納税者15,420戸のうち日雇人足が1,249戸で最も多く、軍関係の仕事に従事していた労働者も多かったのではなかろうか。

ここで若干古くなるが、軍隊糧食部と御用商人との癒着を指摘した記事を紹介しておこう(『仙台新聞』1897年4月6日)。当時の糧食委員は大尉2名、中尉と少尉各1名、助手として下士兵卒各1名から構成されていた。御用商人はこの委員に対して将校には反物、下士には金銭などをそれぞれ贈り、その見返りとして秣には砂や石などを混ぜ、また米には水を含ませるなどして上納しても便宜を図ってもらっており、それに異議を唱えた高潔な下士や上等兵は転任されるという内容である。記事の真偽はわからず、またどこにでもあるような話だが、御用商人という立場は地域経済においてある種の特権を持つが故に羨望、揶揄される存在であったのだろう。なおこの記事が出た1ヶ月後の5月に御用商人の改革が

行われたようで、新たに選ばれた商人は、大倉組(被服・薪炭)、大沼と青海(被服及び修理、洗濯、酒保)、関組と齋川(日用その他の雑品、雑具)、古木と八久(味噌、醤油)、有馬組(魚及び残飯)、梅惣(魚)、西村(八百屋)、前田(牛肉)であった(『仙台新聞』1897年5月7日)。多くの衛戍地に支店を設置していた大倉組以外は、地元の業者であったと思われる、八久(八木久兵衛)、梅惣、青海(官衛御用達)などは市内でも有力商人であり、また梅惣は長期間にわたって軍隊請負の地位を維持したのかもしれない。

さて、第二は下士兵卒が市中に落とす金で、日曜祭日と休暇に外出するものと仮定して、飲食店、散髪、雑貨屋、遊郭の利用者の減少によって80万円程度の減額が見込まれている。遊郭の場合、1ヶ月の登楼者13,000人余のうち軍隊関係者が40%を占めるとされており、1年間で6万円を超える金額になる。このほか劇場(仙台座、松島座)、映画館、寄席なども、日曜日の観客の多くは軍人であり、1ヶ月9,000人が利用するとして、2年で4万円程度の収入を失うことになる。

第三は、士官とその家族などの家賃や下宿料である。渡韓期間中、家族を実家に帰す場合や、狭い家に転居する場合などが考えられることから、全体で20万円程度の減額が見込まれている。また将校の生活費では50万円程度が減ると試算されており、日頃米・野菜・魚などの取引を行っていた市中の商人には特に大きな打撃が予想された。

実際、日露戦時期に空き家が市内全域で800戸余、大通り沿いで200戸(国分町31、二日町27、荒町19、田町18、名掛町13など)生じており、この見込みは必ずしも過大とは言えなかった(『河北新報』1904年7月29日)。ただし、人口はあまり減少していないとされていることから、低家賃の物件への転居などが進んだことがその原因であったと思われる。

第四は、税金で直接には県と市の戸数割が減少することによって、3万円程度の影響が出るとされている。

以上の諸項目を合計すると、2年間で210万円を超える影響が仙台の経済に及ぶことになった。1906年の時の推計と比較すると金額に開きはあがあるが、いずれの検計からも軍隊に依存する仙台の地域経済の姿を垣間見ることができるだろう。

最後に、軍隊と都市社会の関係を考える上で見逃せない物として、残飯の流通と消費を取り上げよう。残飯は、調理の必要がなく薪炭など燃料費の節約にもつながることから、特に「貧民層」の日常生活を支える糧の役割を果たしていた(水野, 2011)。したがっ

て、病院や学校と並んでその一大供給源であった軍隊からの供給減少とそれに伴う価格上昇は、金沢市の事例でも指摘されているように、「貧民層」として死活問題となった(本康, 2006)。

仙台市内の残飯屋について、1876(明治9)年川内に開業したとされる赤木(赤城)商店が草分け的存在で、1907年には赤木の支店も含めて、川内、亀岡町、元常磐町などに5軒ほどがあった(『河北新報』1907年12月30日)。ちなみに当時の赤木の営業税額は52円であったといわれ、市内の商家のなかでもかなりの収益を上げていたことになる。その後1910年には川内周辺に3～4業者と柳原周辺に2～3業者があり、1911年に亀岡や角五郎にあった残飯屋が廃業したが(『河北新報』1911年12月26日)、米価が高騰した1912年6月頃には市内に8軒の残飯屋があったと報じられるなど(『河北新報』1912年6月27日)、市内の業者数は若干だが変動を繰り返していたようである。軍隊との契約による払い下げであることから、業者が容易に新規参入できたとは必ずしも考えられないが、供給と需要の変動によって当然影響を受けたのであろう。

供給量は、予算や景気の動向のほか、兵士の外出回数(日曜日など)や部隊の出勤・帰還などによって増減した。特に日露戦時の減少と日露戦争後の経費節約、増税の影響などによって、需要に供給が追いつかず、1升2銭5厘が3銭5厘に値上げされ貧民の生活を直撃している。一方需用面では、野外での力役型労働が減少する冬季や腐敗しやすい夏季に減少し、また家庭内に一定の副業がある時期など景気が良い時も売れ行きが落ちた。「貧民」も次第に白米を食するようになったためである。

残飯屋の多くは払い下げの関係もあって兵營の近隣に立地しており、顧客は残飯用の布袋か風呂敷、汁用の桶か空き瓶などをもって残飯屋に通った。馴染み客の多くは周辺の「貧民」や労働者などであったが、赤木の顧客は川内地区周辺にとどまらず、七北田方面などにも広がっていたようである(『河北新報』1907年12月30日)。さらに1912年の米価高騰の際などには、「貧民層」とどまらず、下層の俸給者(官吏など)も抵抗感を持ちながら残飯を求めるようになっており(遠城, 2008)、顧客の社会階層も社会経済状況によって変化した。代金は現金払いが多かったと思われるが、月末払いもあり、踏み倒しが多かったため、「残飯代は安いものですから現金で支払ってください」という張札をした店もあったという(『河北新報』1909年1月6日)。

前述した「廃兵館」(高野商店)の場合、1910年頃に

は歩兵第二九連隊、野砲兵第二連隊、輜重第二大隊から1日3回麦飯と汁の供給をうけており、その量は麦飯6～7斗、汁1斗ほどで、麦飯1升は3銭、汁2合5勺の柄杓4杯は1銭でそれぞれ販売されていた。廃兵館の残飯で日々の生活を送る者は、実際に買いに来る馴染み客が1日25名程度であったことからその家族も含めて100人程度と推定されており、ほかの業者と合わせると市内で500人前後がこの残飯によって生活を維持していたと考えられている。そのため残飯供給の減少は、貧民を飢餓と「生活難」に陥れるのみならず、市内の治安にも影響を及ぼしかねないとの懸念が示されている(『河北新報』1910年2月23日)。

なお残飯以外にもさまざまな払い下げ品が市中に流通していた。たとえば缶詰である。ある広告(『東北新聞』1906年12月16日)によると、今藤商店(東五番丁)と佐藤新三郎(東一番丁)が取扱所となって、「陸軍糧秣廠御下品」として外国製の牛肉缶詰や民間製牛肉大和煮、鯉缶詰、鱈ソボロ缶詰の卸売が行われている。このほか兵士や馬の糞尿も周辺農家に重要な肥料として活用されていたと思われるが²⁾、それらの具体的検討は今後の課題としたい。

2. 「貧民長屋」について

1903年1月に前年の凶作の影響を受けた宮城県は細民救済に乗り出した。仙台市でも「貧民」の状況調査が実施され、市内で「貧民」とされたのは698戸で、貧困の原因をみると、大家族が159戸で最も多く、怠惰・放蕩150戸、生計維持者の死亡120戸、老衰79戸、疾病53戸が続いている(『東北新聞』1903年1月21、22日)。『東北新聞』はその「論叢」で、調査の信ぴょう性については一定の留保を置きながらも、都市経営の方針として「貧民」に職を創出する必要性を指摘している。

さて「貧民」の生活や、「貧民長屋」、「貧民窟」、「残飯長屋」、「木賃宿」などと表現されたその住処について、日露戦争以前は報道されることは少なく、いくつかの例外を除いて散発的に可視化されるにとどまっていたように思われる。その例外とは、社会を不安に落とし入れた伝染病の流行であり、あるいは社会の不穏が高まった凶作や物価高騰である。つまり都市社会が危機に直面し揺れ動く時、「貧民長屋」はその最も悲惨かつ危険な場所として、市民の世界とは対蹠的な場所として記述された。たとえばコレラなど伝染病の流行に際して、「貧民長屋」はその源として名指しされ、「怠惰で不潔」とされた人々の生活慣習は監視と改良の対象となっていく(遠城

2015)。

また物価高騰に際して市や地域名望家らは、米の廉売や施米といった対策を取ったが、その際区長らの調査により主に戸数割等級に基づいて、「貧民」とは誰かが特定されることになった。このほか、明治中期から外国人宣教師らも「貧民」の救済事業に着手しており、残飯屋の顧客などを対象にその境遇や生活を調査して、「支援に値する貧民」を選び出している。ただし、慈善は往々にして「貧民」に自活の精神を失わせ、「出来得る限り補助を西洋人から受けて遣ろう、夫れには何処までも真面目な振りをして、其説や講義を聴くがいい」という状態を生んだことから、宣教師は長屋を建設し、生活改善を行う方向を取っている(『河北新報』1904年1月4日～6日)。貧民の感化や生活改善を目的とした長屋建設は、同時期に日本人によっても始められており³⁾、慈善の効果の実現という視点から、貧民の生活それ自体に対して関心が寄せられるようになった。

日露戦争後、毎年歳末を迎えると新聞記者による「貧民窟」への探訪(「探検」)記事(ルポルタージュ)が連載されるようになる。新聞社による慈善活動はまだ始まっていないが、「貧困」がより一般的に都市社会問題としてクローズアップされるようになった印といえるだろう。「探検」という言葉からもうかがえるように、記者らにとっても長屋の居住者の取材は慣れない行為であり、ある記者ははじめて長屋に足を踏み入れる際、観察してみたいという気持ちと「社会の裏面」を生きる同胞の苦痛を聴くという行為の間で逡巡し、また別の記者は社会の階級打破を訴える社会主義者の情熱はないが、「貧民」の苦境を無視することもできないとして、「貧民」のありのままを書きたいと記している。もちろん記者のまなごしは「ありのまま」の現実を写すことはなく、既存の社会認識の枠組を強化する場合も多かったが、時にはそこからはみ出る「発見」を記すこともあった。

ここでは他都市における記述(阿部, 2004)も参照しながら、新聞記事のなかで「貧民」の住処や生活がどのように描かれたかを見ることにしたい。主な記事は、『河北新報』の「年末の貧民窟(1)～(5)」(1906年12月22日～29日)、「年越前の貧民(1)～(6)」(1907年12月4日～11日)、「木賃宿探検記(1)～(9)」(1908年12月22日～30日)である。

まずその立地場所について、仙台の場合、東京などに見られたような集住地は形成されておらず、市中心部の路地などにも長屋が散在しており、極端に言えば市全体が「貧民長屋」であるという認識さえあった。ただし主な「貧民長屋」と認識されていた地

区は、東は第四連隊兵營のある榴ヶ岡付近、西は川内の各兵營の周辺、南は河原町周辺、北は北山町周辺などで、まさに市を取り囲むかのように周縁部に立地していた。ただし、かつて市内の「貧民窟」の中心とされていた地区が、現在では活況を呈しており、近い将来その風景を一新するのではないかと予想されているように、地区ごとの職業構成の相違や市の発展の影響などによって、「貧民窟」も変動しつつあった。

長屋には、戸口などが朽ちかけ新聞紙で穴をふさぎ寒さをしのぐ「廃家」が立ち並び、窪地で水はけが悪く湿気の多い土地には子どもたちの尿尿が放置され、外から丸見えの便所と大根が干された共同流しが隣接しているため、きわめて非衛生的であり、その状態は何度か「豚小屋」と評されている。そして記者はこうした状況でも病気に罹る「貧民」が少ないことにその「徳」を見る一方で、むしろ長屋の陰鬱な雰囲気や「貧民」の心に圧迫を加えていることを心配する。罹患者が少ないという判断が正しかったかどうかはわからないが、彼は身体的強さと精神的弱さを対比することで、「貧民」の社会問題をその道徳や精神の問題としてのみ理解する枠組を再生産することになったといえるだろう。

一方、別の記者は「貧民」を二つに分類することで探検を始めた。第一は天災や病、出稼中の不慮の事故など、真に同情すべき不幸の「貧民」であり、第二は自らの怠惰ゆえに奈落へと落ちた「貧民」である。この区分それ自体はさまざまな文脈で反復されており、たとえば農村部と異なり都市部では、「浮華惰弱の悪風」に染まった後者の「貧民」が多く、これをいかに規律化するかが問題とされている（『河北新報』1906年1月12日）。ただし、この記者が次に着目したのは「貧民」の仕事であった。下駄の齒入れ職人、羅宇（煙管）職人、鑄掛錠前直、研屋、小箱師、按摩師、洋傘の古柄磨き、玩弄師、提灯のひも作り、飴などの触れ歩き、風船玉売、辻占売、屑屋、露店のぼろ道具商、古金買、襦袢買、灰買、土足人夫、荷馬車挽、大工、人力車夫、煮豆受買、南京豆屋、おでん・酒、鍋焼きうどん、淫売など、その仕事は実に多様であり、そこには過酷な条件の下で働く「貧民」の姿があった。そして「貧民」と一括りにされていた人々の内部に、組織化され、稼ぎも多く「貧民の殿様」と呼ばれた人力車夫、収入は僅少だが自分で日常生活をやり繰りできる者、老人一人や子どもだけなど働くことができず救済の必要な人々というように、仕事内容、世帯構成、稼ぎ手の有無などの相違が明らかとなることで、記者は仕事を持つ人々を「貧民」と

呼ぶことに躊躇を感じるようになっていた。

借家の家賃であるが、30銭から1円50銭程度で一昔前に比べるとかなり高騰しており、家賃の滞納や夜逃げが日常茶飯事となっていた。1909年11月に貸家業者組合の組織化が報じられており、その目的が貸し倒しの防止と貸家の紹介の二点であったことから、滞納は必ずしも「貧民」に限定されない問題だったと思われる。この状況に対して、二階建の長屋の住民は二階を他人に貸す「孫借屋」を行うなど、生活の不便を我慢して少しでも収入を得ようとしていた。こうした「共同生活」によって、収入の異なる「貧民」の間に社会的関係が形成、維持される場合もあったのではなかろうか。

このほか食生活について、長屋の住民たちの多くは残飯屋に依拠していたが、なかには「南京米」を常食とする長屋があったとされ、そこは一段低い存在として見られていたようである。その背景には、「貧民」や「細民」が、臭気や腹持ちの悪さ、さらには「世間体」の維持などの理由から、次第に外国米を食べなくなっていたことがあったと思われる（遠城2014）。そして食をめぐる嗜好の変化によって、従来の外国米廉売といった方法では都市問題に十分対応できない状況が生じるようになった。

さて、「貧民」の職・住・食の検討から浮かび上がったのは、その集団の多様さあるいは集団内の階層差であったといえる。「貧困と悲惨」、「怠惰と不潔」といった言葉で括られながらも、記事にはそれでは必ずしも捉えきれない日常生活の姿が時に現出していた。しかし、こうした姿は「貧民」に関わる人々に必ずしも認識されたわけではなかった。1907年の連載記事が終了した後、「細民救助の注意」（『河北新報』1907年12月12日）が掲載されたが、過度な救恤は細民を怠惰にしてしまうこと、現金の施与ではなく必要な物品を施与すること、区長などによる救恤後の日常生活の指導と監視が重要であることなどが、慈善家に呼びかけられており、そこには働く「貧民」の姿を見ることはできない。

IV おわりに

日露講和以後、凱旋の準備が再び始まっている。国分町区では歓迎費用として1,072円の予算を組み、町内各戸に割り当ての金額を設定したほか、名掛町、新傳馬町、大町、南町、東三、四、五番丁、国分町、川内地区は、大国旗や提灯を掲げる準備を行い、また複数の町を組み合わせた連合祝捷隊も結

成された。出発地となる停車場には凱旋門が建設されたが、ここで軍隊と市の間で小さな諍いが生じている。師団関係者がプラットホームでの歓迎者を軍の高等官待遇者に限り、これまで凱旋に尽してきた市会議員や区長らを排除したのである。これに対して早川市長が抗議して交渉の末、出入りは許可され、12月24日の西島助義第二師団長らがホームに降り立った時、市会議員もその場に立つことができた。街路では多くの市民が師団長を万歳で迎え、大橋にも凱旋門が立った(『河北新報』1905年12月25日)。

その一方、同時期に宮城県は凶作対策に追われている。「戦争々々で貧民は一切社会から忘れて居るが、戦争でも彼等は困窮して居るのは敢て変りは無」(『河北新報』1905年8月11日)だったのである。市が外国米(台湾米とラングーン米)の廉売を決定したほか、村松亀一郎や小野平一郎らの市会議員有志も救済会を組織して土木事業など救済案の検討を開始している。廉売に対しては市内の米商から強い反対運動が起こり、仙台商業会議所の八木久兵衛会頭らも窮民に限定販売し、市民には販売しないことを求めた結果、市は地域有力者に委託していた米の販売を中止して、米商に委託することに方針転換した。このほか窮民989人余(1906年3月現在)に対して施米を行い、その対象者は次第に減少したが初夏まで続いている。

市内のある実業家は仙台の今後の都市経営に触れて、米の廉売に満足するのではなく、工業の発達を支援、促進して、疲弊した地域経済を回復し雇用創出に努めるべきと語った。2年後の1907年の市会で五大事業(上水工事、電気事業、市区改正、電気軌道敷設、市立公園設置)が提起されて以降、市と地域名望家たちは仙台の近代都市への「離陸」を模索するようになるが、「……仙台市民の独立自営の風潮は影響に打撃され、軍隊の恩恵によりて糊口せんとする惰民また交々生じ、遂には軍隊存在せざれば生活し能はざるの憐れむべき境遇に陥れるもの少なきとせず、之れ実に当市の為めに歎ずべきことにして、師団の存在は却って我市を衰微せしめし一因たらずんばならず、……独立自営の精神を以て軍隊なくとも市をして隆盛ならしむるの策を講せざるべからず……」(『河北新報』1910年1月26日)と述べられたように、軍隊の存在は、工業化や日常生活の側面とともに市民の心理面に対しても、地域の発展に負の作用を及ぼしていたと考えられる。

注

- 1) 営業税額と一部の町名については、股野七郎編『宮城県商工人名録』(1912年)(国立国会図書館近代デジタルライブラリー、info:ndljp/pid/780260)を参照した。
- 2) たとえば福岡県小倉市・企救郡にあった第十二師団の場合、郡が企救郡肥料購買組合を設立して師団と契約を結び、下肥と厩肥を買い取って組合員に分配する計画を進めている(『福岡日日新聞』1911年3月22日)。
- 3) 「社会事業奨励ノ件通牒」『宮城県庁文書大正十三年社会公設賃屋住宅組合雑』(2-T13-2007)(宮城県公文書館所蔵)。

文献

- 阿部安成 2004. 「都市周辺に向う感知の力」中野隆生編『都市空間の社会史 日本とフランス』164-187, 山川出版社。
- 荒川章二 2001. 『軍隊と地域』青木書店。
- 荒川章二 2007. 『軍用地と都市・民衆』山川出版社。
- 上杉和央編 2012. 『軍港都市史研究Ⅱ 景観編』清文堂。
- 遠城明雄 2008. 明治後期の都市社会の一断面, 史淵145: 243-268.
- 遠城明雄 2014. 米を食べる—明治後期日本の都市社会, 池口明子・佐藤廉也編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻 身体と生存の文化生態』115-137, 海青社。
- 遠城明雄 2015. 伝染病・都市社会・衛生組合—明治期の仙台を事例に—, 史淵152: 123-174.
- 河西英通 2010. 『せめぎあう地域と軍隊「末端」「周縁」軍都・高田の模索』岩波書店。
- 功刀俊洋 1984. 一九二〇年代の軍部の思想動員—新潟県上越地方の事例—, 一橋論叢91(3): 17-34.
- 郡司淳 2004. 『軍事援護の世界』同成社。
- 櫻井良樹 1997. 『大正政治史の出発』山川出版社。
- 佐藤雅也 2006. 地方都市の近代—軍都・学都と仙台—, 新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学①都市とふるさと』62-93, 吉川弘文館。
- 難波信雄 1994. 日露戦争時の仙台, 市史せんだい4: 126-134.
- 仙台市役所編 1908. 『仙台市史』仙台市役所。
- 能川泰治 1997. 日露戦時期の都市社会, 歴史評論563: 23-39.
- 松下孝昭 2013. 『軍隊を誘致せよ』吉川弘文館。
- 水野公寿 2011. 軍都熊本への成立, 熊本近代史研究会編『第六師団と軍都熊本』47-93, 熊本出版文化会館。
- 本康宏史 2006. 「軍都」金沢と地域社会—軍縮期衛戍地問題を中心に—, 橋本哲哉編『近代日本の地方都市—金沢/城下町から近代都市へ』305-348, 日本経済評論社。
- 山田明 2005. 日露戦後明治期における廃兵の生活問題と廃兵院政策の特質, 日本福祉教育専門学校研究紀要13(1)別冊: 65-84.